様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２８５６

研究課題名（和文）イスラム神秘主義思想の変遷と実践に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Transition and Practice of Islamic Mysticism

研究代表者
井上　貴恵（Inoue, Kiel）

明治大学・文学部・専任講師

研究者番号：７０８４５２５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はスーフィー教団という組織をスーフィズム思想という面から考察する事で、現代まで継承されるスーフィズムの源泉としての中世期スーフィズム思想の役割を明らかに提示することを目指した研究であった。具体的に本研究は、1）教団の始祖（教祖）と見做されたスーフィーと、2）教団の実質的な運営者、そして3）教団組織という3者に注目する。3者の思想的な関わりの様子を資料から読み解くことで、１）教団の始祖とされたスーフィーの思想を教団運営者がどのように理解し、取捨選択を行ったのか、及び２）始祖の思想は教団においてどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
最終年度においては特にメヴレヴィー教団に関わるテクストであるMathnawi-i manawi及びMaarifの精読に注力し、研究成果を2回の研究発表、及び一本の翻訳論文として発表することができた。メヴレヴィー教団に関する思想ベースの研究は世界的に見ても未だ寡少と言わざるを得ず、本研究の有する学術的意義が示されたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to clarify the role of medieval Sufi thought as a source of Sufism inherited up to the present day by examining the organization of Sufi orders from the perspective of Sufi thought. Specifically, this study focuses on three parties: 1) the Sufi who was regarded as the founder of a order, 2) the actual administrators of orders, and 3) the organization of orders, and through the reading of the ideological relationship between the three parties, it is possible to understand how the administrators of the order understood the ideas of the Sufi who was regarded as the founder of orders and how they chose to discard them.By the examination of the texts, I aimed to reveal: 1) how the Sufi founders of orders understood and selected the ideas of the Sufis, and 2) what role the ideas of the founder played in the organization of orders.

研究分野：イスラム学

キーワード：スーフィズム　イスラーム　神秘主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

イスラム神秘主義（スーフィズム）は、戒律や規律の遵守を重んじる外面的なイスラムへの反発から生まれた、修行などを通した内面的信仰の深化を図る思想運動を指す。もともと修行者（スーフィー）と神とのプライベートな関係性を深めることを目的としていたスーフィズムは、神との合一を究極の理想とする神秘主義として徐々に体系化されていった。とりわけイランでは、神を求める修行者と神との関係を男女の恋愛関係に模し、愛や熱狂、酒など陶酔的な用語を使用して情熱的に謳いあげる作品が多く書かれた。

8 世紀前後に発生したスーフィズムは時代を経るにつれ、志を同じくする同士が集うことによって集団化していった。個々のスーフィーによる知的営為の傍ら、イスラム世界の各地に「スーフィー教団」が発生したのである。教団が特に隆盛を誇ったのは 13 世紀以降、政府など公的な権威から宗教活動の公認を受けるようになってからである。スーフィー教団の発生と興隆により、これまで一部の知的エリートの個人的な営みであったスーフィズムも一般信徒に門戸を開くこととなり、種々の修行形態が生み出された。大衆のスーフィズムは現代まで残存し、イスラム世界における神を求める道の 1 つとして人気を博している。

しかしながら中世期を中心に発展した個々のスーフィーによるスーフィズム思想研究と、教団組織を基盤とした集団的かつ実践的なスーフィズム研究とは異なる研究分野によって担われることが主である。つまり、スーフィズム思想研究は文献学的な手法を用い、思想、あるいは宗教学分野が担い、一方のスーフィー教団研究は、歴史学や参与観察を含む人類学の方法論に基づいた、現代の教団研究が主である。応募者はこの分断を研究上の問題点であると考える。というのも、多くのスーフィー教団は中世期に活躍したスーフィーを教祖（始祖）と見做し、始祖の思想を「教団の聖者の教え」として教団の教義や方法論として取り込んでいるからである。つまり、中世期より継承されたスーフィズム思想は、スーフィー教団を通し現実世界に具現化された部分が存在するのである。

上記を踏まえ本研究は、1）教団の始祖（教祖）と見做されたスーフィーと、2）教団の実質的な運営者、そして 3）教団組織という 3 者に注目する。中世期のスーフィズム思想が、教団運営者によって教団教義へと取り込まれ、教団員によって実際に修行の一環として実践される、という流れに沿い、3 者の思想的な関わりの様子を資料から具に読み解くことで、以下の 2 点について明らかにすることを研究の目的とする：①教団の始祖とされたスーフィーの思想を教団運営者がどのように理解し、取捨選択を行ったのかを明らかにする、②始祖の思想は教団においてどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

以上の研究の遂行により最終的には現代社会におけるスーフィズムと中世期スーフィズム思想の連関に関する研究も可能となると応募者は考える。スーフィー教団に代表される、大衆化されたスーフィズムは現代においても現存しているからである。旋舞（セマー）の修行で知られるトルコのメヴレヴィー教団などもその 1 つである。また現代社会においてスーフィズム自体も特にスピリチュアリティの一種として広く北米域やヨーロッパにおいて広く受け入れられており、ヨガと組み合わせたスーフィズムの実践や、自己啓発の一環としてのスーフィズム理解など、新たなスーフィズム解釈が広がっている。本研究は現代社会と中世期のスーフィズム思想との連関に関し新たな知見を得る際の布石となろう。中世期を中心に発展した個々のスーフィーによるスーフィズム思想研究と、教団組織を基盤とした集団的かつ実践的なスーフィズム研究とは異なる研究分野によって担われることが主である。つまり、スーフィズム思想研究は文献学的な手法を用い、思想、あるいは宗教学分野が担い、一方のスーフィー教団研究は、歴史学や参与観察を含む人類学の方法論に基づいた、現代の教団研究が主である。応募者はこの分断を研究上の問題点であると考える。というのも、多くのスーフィー教団は中世期に活躍したスーフィーを教祖（始祖）と見做し、始祖の思想を「教団の聖者の教え」として教団の教義や方法論として取り込んでいるからである。つまり、中世期より継承されたスーフィズム思想は、スーフィー教団を通し現実世界に具現化された部分が存在すると考えられ、これに基づき本研究は「教団運営者による始祖の思想の受容の様子の研究」及び「中世期スーフィズム思想の、スーフィー教団における具現化に関する研究」を行うものである。

２．研究の目的

本研究の最終目標は、13 世紀以降活況を呈したスーフィー教団を思想面から検討することで、スーフィズム思想研究とスーフィー教団研究との接点を見出し、両者を一連の思想史として捉えることである。スーフィー教団という組織をスーフィズム思想という面から考察する事で、現代まで継承されるスーフィズムの源泉としての中世期スーフィズム思想の役割を明らかに提示することを目的とする。

まず研究目的①教団運営者による始祖の思想の受容の様子の研究についてである。応募者はこれまでの研究において、中世期に活躍したスーフィーの思想を教団運営者が教団教義として取り入れる際には、少なからず思想的な取捨選択を行うという点について明らかにしてきた。教団運営者は組織運営という現実的な視点から見て有利であると考えた始祖の思想は積極的に取り込み、不利と見たものは敢えては強調しないという姿勢が見て取れる。教団運営者による思想

的な選択の様子の詳細を明らかにすることで、当時のスーフィー教団が公的な権威や社会から期待されていた役割がどのようなものかを知ることが可能となろう。

次に研究目的②中世期スーフィズム思想の、スーフィー教団における具現化に関する研究である。研究目的①の結果を受けた上で、教団運営者によって積極的に取り入れられた始祖のスーフィズム思想が、教団においてどのように実践されていたのかについて研究することが必要であると考える。中世期のスーフィズム思想を実際に教義として具現化する際には、物理的に当時の教団において教団員らが実践可能であり、且つ自身の修行に効果的であると教団員らが実感できるかという点が重要である。スーフィズムの実践における方法論の変遷を明らかにすることによって、中世期のスーフィズム思想が、教団運営者による思想的選択の後に、更に実践論として洗練されていく様子を詳らかにしたい。

３．研究の方法

本研究においてはルーズビハーン教団、メヴレヴィー教団などに属した教団運営者と教団始祖のテクストを使用し、「教団運営者による始祖の思想の受容の様子の研究」及び「中世期スーフィズム思想の、スーフィー教団における具現化に関する研究」を軸として教団運営者の思想的取捨選択の様子を明らかにした。本研究において使用した代表的なテクストは以下である。
1）Ruzbihan-Nama（ルーズビハーン教団教団史）2）al-Futuhat al-Makkiya（イブン・アラビーの著作）3）Nafahat al-Uns（ジャーミーの聖者伝）4）Fi-hi ma Fihi、 5）Majalis-i saba 6）Maarif 、7）Mathnawi-i manawi（メヴレヴィー教団の始祖らの作品）8） Maarif（メヴレヴィー教団の運営者、スルタン・ワラドの作品。）9）Manaqib al-Arifin、10）Risala-i Sipahsalar dar manaqib-i hazrat-i khudavandigar（メヴレヴィー教団教団史）

４．研究成果

応募者はこれまでの研究において、中世期のスーフィズム思想の変遷を、1）預言者・聖者論、2）現世における神の顕現論、3）神－人関係論に着目して指摘してきた。これら「神と人との関係」論は 13 世紀以降も主唱者（以降教団の始祖となる）の弟子や子孫によって引き継がれており、応募者はその変遷の様子を研究してきた。特に 13 世紀以降のスーフィズムにおいて重要であるのは、この時代にスーフィズムが教団化したことにより、教団教義として始祖の思想が取り入れられたという点である。継承者は始祖の教義を継承するとともに、教団という組織運営の観点から、しばしば組織を継続していくのに有利な方法で始祖の思想を利用している。本年度「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』第 4, 5 章翻訳」（『イスラム思想研究』第 5 号（東京大学大学院人文社会系研究科イスラム学研究室、71-82 頁、https://doi.org/10.15083/0002007844、2023 年 8 月）として翻訳論文を投稿したが、メヴレヴィー教団の継承者であるスルタン・ワラドは教団における理想的な師弟関係について繰り返し教団員らに教えを説いていた様子がうかがえた。その際に彼が理想としたのは教団の始祖らの世代の師弟関係であった。またこれら教団に関わるテクストの翻訳を基に「メヴレヴィー教団と聖者」（日本宗教学会第 82 回大会、東京外国語大学、2023 年 9 月）及び“Rumi and Sultan Walad's View of the Saints: The Authorization of Saints in the Formative Era of the Mevlevi Order,” （Sufi Thought and Practices from Past to Present Workshop, Uskudar University, Istanbul, October 2023）と題し研究発表を行った。井上の上記 2 つの発表の詳細は以下である。スーフィズムにおいて預言者・聖者論というテーマは常に議論の中心であり、預言者や聖者は平信徒とは区別された特別な存在であり続けた。とりわけイスラームを背景にこれらの特別な人々に関して語る際に問題となるのが聖者と称される人々の取り扱いである。預言者ムハンマドが預言者性の封印であるとして、預言者性の周期はムハンマドと共に終焉を迎えたとされるため、以降何らかの宗教的カリスマ性を有する人物は否応なく聖者という分類にカテゴライズされるのが常であったからである。このため聖者というカテゴリー自体は非常に曖昧な分類枠組みとして機能してきた。このような背景をもとに、13 世紀前後から、預言者論と聖者論とは並行的に語られるようになり、両者の境界はあいまいになっていく。例えばイラン南部の都市で活躍したスーフィーであるルーズビハーンなどがこの代表である。またのちにこの考えは「預言者の後継者としての聖者論」として結実する。預言者の後継としての聖者という概念を特に発展させたのは、イブン・アラビーである。イブン・アラビーとほぼ同時代を生きたルーミーもまた、預言者と聖者との役割を同等であるとして取り扱う。この傾向はルーミーの息子であるスルタン・ワラドも継承している。しかし単に継承するだけにとどまらずスルタン・ワラドはさらに、預言者の後継としての聖者の役割を、教団における現実の役職と連関させていく。これまで語られてきた聖者のイメージを、実際に教団に所属する現実のシャイフと見做すことで、スーフィズム史に置いて語られてきた聖者論と教団のシャイフとを結びつけたのである。

また 2024 年 3 月に“Rumi and Sultan Walad’s way of understanding Hallaj”と題しこれまでの研究成果を英語論文として投稿した。（*Journal of the Institute for Sufi Studies* vol. 5、2024 年 5 月刊行予定、印刷中）本年度の上記の研究成果により明らかとなったのは、スーフィー教団の思想的源泉と目される中世期のスーフィーの思想を基にしつつ、次世代にあたる教団経営者は、「教団」という集団を導いていくにふさわしい形にその思想を再解釈しているということであった。例えばメヴレヴィー教団の継承者であるスルタン・ワラド（d. 1312）は、教団の思想的基盤である父ジャラールッディーン・ルーミー（d. 1273）の思想を基盤とすることでメヴレヴィー教団を発展させた教団経営者である。スルタン・ワラドは多くの著作において、カリスマ的人気を誇った父ルーミーの考えを解釈し、保持し、後世へと伝えていくことが自身の著述の目的であると度々記

しており、一見するとそこにスルタン・ワラド自身の意見を反映させる意図はないかのような但し書きを付している。しかしながらスルタン・ワラドの作品を精読すると、父ルーミーの著作の解釈を基盤としつつも、時には父ルーミーとは反対意見を述べるなど彼独自の思想も多く含まれていることが判明した。

以上の研究を通し申請者は、中世期に活躍した教団の思想的基盤となるスーフィーの思想を、次世代の教団経営者が、当時の教団化の潮流に合わせた形に洗練していく際の詳細を更に明らかにすることで、中世期のスーフィズム思想と教団との相互の関係性をより正確に把握することが重要であると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 井上貴恵	４．巻 第5号
２．論文標題 「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』第4，5章翻訳」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『イスラム思想研究』	６．最初と最後の頁 71-82頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002007844	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Kie Inoue
２．発表標題 Rumi and Sultan Walad's View of the Saints: The Authorization of Saints in the Formative Era of the Mevlevi Order
３．学会等名 Sufi Thought and Practices from Past to Present Workshop, Uskudar University, Istanbul,（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関